

撰大乘論の造論の意趣について

片 野 道 雄

一

インド佛教思想の展開において、ナーガールジュナ——アールヤデーヴァ、マイトレヤ・アサンガ——ヴァスバンダウの時代を迎えることによって大乘の根源が殊の外窮められ、昂揚せられようとした。それら祖師方によるそれぞれの論書にはそれぞれ独自の造論の意趣、あるいは、論の構成があるのであるが、それら諸論書において、殊に大乘なる佛教が昂揚せられようとしたということは、その時代の思想領域における歴史的使命の実践の外なかつたのであらうと考えられる。それら諸論書は、經典とはその特色とか性格を異にするのであらうが、それら諸論書も、まさしく、龍大な数に上る大乘經典という様相をもって佛陀精神の本意のあるところが、それ

ぞれの歴史的な環境に対処し、次々に記録せられ、増広せられ、それによってそれらの經典は歴史的使命を果し遂げていったものとして先覚によって達観せられている事情と、同じような佛教展開の動向にあったものと考えられる。それらの中であって、今日伝えられる文献として漢藏の資料群によって知られる、しかも周到な構想のもとに著述されたものとせられるアサンガの代表作『撰大乘論』も、そのことが顕わとなっているテキストの、代表的なものの一つであると言って過言ではないのである。アサンガのそれは、既に述べるまでもなく、その時代の思想領域の中であって、その時代の歴史的な環境に対処して、「アビダルマという大乘の經」(「アビダルマ大乘經」)に印象せられる言教を特に著述の巻頭に掲げてそれを基本とし、佛陀の言教としての大乘仏教の根源

を窮め、大乘思想の根本を撰約せられようとするのである。具体的には序章および十章によって構成されているのであるが、その序章はそれとして、論全体が総括される様相をもって本論の目指す要旨を提示しているものと考えられる。それを厳密な様相として理解することは極めて為し難いのであるが、仮せめながら、その序章を中心に『撰大乘論』の造論の意趣の若干について考察を試みることにする。

二

インド佛教の後期の大乗佛教者として知られるヴィニターデーヴァなどによると、釈論を開始するについて、その論の巻頭文を中心として、その論の成立を究明する条項の規定の仕方として、(1)論の *abhidheya* (所詮)、即ち、著述の主題、(2)論の *prayojana* (所用)、著述の主なる目的、(3)論の *prayojanasya prayojana* (所用の所用)、即ち、目的の目的、あるいは、論の目的を通じての究極的な目的、(4)論の *sambandha* (相属)、即ち、目的のための方便である論とその方便によって遂げられる目的が確実な相での関連性のあること、あるいは、論が師資相承によるところのものであること、などの条項

が注意せられている。^②このような論の成立についての条項の確認の仕方は、それらの条項の増減の立場の相違が見られるとは言え、ヴィニターデーヴァのほか、カマラシーラ、シャーンタラクシタ、ダルマウッタラ、ハリバドラ、バーヴァヴィヴェカ、チャンドラキールティ、アヴァローキタヴウラタ、スマティシーラなどによって屢々踏襲せられているのであって、それらの条項が審議せられることによって論書の造論の意趣が明らかにせられようとする。

従って、それらの註釈者は、論書の上に、註釈者それぞれの規定の仕方による諸条項の布置せられているものが、真の意味での造論の意趣と称せられる性格のあるものであるとせられるのである。しかし、かかる諸条項による造論の意趣の究明の仕方は、今日伝えられる『撰大乘論』に対する註釈書のいづれにも関説されていない。それについて、ヴァスバンドゥは述べるまでもなく、アスヴァブハーヴァなどその時代の佛教者達には、かかる釈論の仕方をもちて造論の意趣を究明し、論を解説していく学風は確立されるに至っていないものと考えられるが、造論の意趣が述べられるについては、その基本として、人が未だその論の内容に入らないときには、そ

の所論の目的は未頭のものであり、そういう未頭、未了解のものはそれを了解し得る手段がないから、その論を学ぼうとする者の心を捉えるために、それが総括的に表明せられる、^④ということでもあるのであるから、その点よりすると『撰大乘論』の巻頭に置かれている、論の綱要を述べるその序章を以って、本論の造論の意趣がまさしく表明せられているものと考えられる。

ところで、『撰大乘論』の註釈書の一つとして知られるチベット訳 Vivitti-guhyārtha-piṇḍavyākhyā (以下 Piṇḍavyākhyā と略称する) の冒頭の説明によると、『瑜伽師地論』は声聞乗などと共通するものや、共通しない菩薩乗特有のものについて著わされているとし、それに對して、この論は声聞乗などと共通しない十の語句の意味(論項)によって大乘すべてを撰約することを考えて著わされているのであって、大乘の教説の中の特定のテーマ^⑤を以って著わされているのではない、^⑥といって、また、ヴァスバンドゥの註釈に於ける帰敬偈の終りにも示されているように、本論を『瑜伽師地論』特に「撰決撰分」に對比せしめて、アサンガによって造論せられた本論の存立の位置づけ、或いは、その使命について閑説せられていることでもあるが、アサンガは、その時代の

思想領域にあって、如何なる造論の意趣をもって『撰大乘論』を講述し著述せられたか、その造論の意趣という点についても久しく関心のよせられているところである。さて、『撰大乘論』序章の内容を略述すると、次の如くに理解せられるかと思う。

大乘「の意味」をよく覺了した菩薩は、大乘の偉大性を称述せんがために、世尊の面前で「お許しを得て」所謂大乘に関して、「アビダルマ大乘經」の中で諸佛世尊の十種のすぐれたるによって最勝なる言葉^⑦を宣説している。

すなわち、諸佛世尊の「所知依」の勝れたるによって最勝なる言葉、諸佛世尊の「所知相」の勝れたるによって最勝なる言葉……。

という講述から開始して、以下、菩薩によって宣説されている、諸佛世尊の語句十種を掲げてそれらを概説し、それら十種の語句は、

大乘が佛の言葉なるもの(buddhavaśanatva)である。ことを表明すると共に、声聞乗には未だ説かれていない、勝れた、

これら十の依処は世尊によって大乘の中で最勝にして最上なるものとして説かれたものであって、それ

故に、大乘に關して諸佛世尊の十種の勝れたるによつて最勝なる言葉が知られるべきである。

と述べている。そして、

これら十の依処は大菩提をよく成就せしめるものであつて、一切智智を証得するものとして、よく相應し、順応し、矛盾がない。

として、次に二の偈頌を掲げている。

(1) 所知依と「所知」相とそこに悟入すること、
その因果と、それ「因果の修習」の別態と、三
學と、その果なる斷滅と、智「とを示す」乘は
最上となるものであり、最勝である。

(2) 何となれば、この教説は他には見られず、これ
らは最上なる菩提の因として見られるが故に、十
の依処を説くことによって、最勝である大乘は佛
の言葉であると認められる。

更に、これら十の依処の次第、実践を概述することによつてまさしく佛道の成就せられるものであることが示されて、

しかれば、この教説において大乘の総ては円満となるのである。

と本論の序章は結ばれている。

『撰大乘論』序章を通じて先ず注意せられることは、その序章の冒頭において、アサンガが大乘の根源を窮め大乘の根本を摂約しようとする『撰大乘論』の成るについて、佛教者として最も基本とせられる三宝によることを以て開始せられていることである。そこには、本論十章の規範とせられる十種の語句がアサンガ自身の独断の発想のものとするのではなくして、三宝を通じて大乘佛教の核心に領づき、三宝によって拝承せられるところに従つて、大菩提を成就せしめる佛教の大乘なるものは単的には十種の語句によつて摂約されとの確信が起こり、それらを本論講述の主要テーマとして、諸先輩による大乘思想を総合し統一せられようとするアサンガの思索の経緯を如実に示しているものと管見せられる。そして、その三宝のもとに展開する「アビダルマ大乘經」、或いは、二偈は本論の造論の立場を考察する上に主要な意味をもつものと考えられる。

三

本論の講述せられるについての言教のまさしくの所在は、先述する如く「アビダルマ大乘經」に歸せられているのであるが、それについて幾多の問題が提起せられる

であろう。その経の性格については、既往の先覚の研究によると、未詳とせられる外、既に指摘せられているように、次の如き二類の見解に至っているようである。

その一の見解としては、「アビダルマ大乘経」(玄奘訳「阿毘達磨大乘経」)なる經典の全容は今日明らかとなっていないが、それは、『十地経』や『般若経』のように、何らかの一定の様相をもった単独の經典名、あるいは、一群の經典名であろうとの前提のもとで、本論との関係性が考えられようとしている。その立場は、本論序章の冒頭においてチベット訳もそうであるが、真諦訳を除いて、「アビダルマ大乘経の中に説かれる」という様相で見られること、本論中において、「アビダルマ大乘経の偈の中に説かれている」として偈頌を掲げていること、或いは、本論の末尾に、漢訳には、

阿毘達磨大乘経中摂大乘品、我阿僧伽略积究竟(玄奘訳)

阿毘達磨大乘修多羅中摂大乘品、解积究竟(笈多共行矩等訳)

阿毘達磨大乘蔵経中名摂大乘、此正説究竟(真諦訳)と訳述せられていることなどに拠るものと考えられる。それについて宇井伯寿博士は『摂大乘論研究』において、^⑧

特に真諦訳を中心にしてその序章の冒頭の訳、

摂大乘論即是阿毘達磨教、及大乘修多羅、

或いは、末尾の訳文に注意し、更にはその後の本論の註釈書にも言及せられて、その立場には幾多の矛盾のあることを指摘されているようである。

第二類の見解としては、チベット訳資料をも重視して、特に Pindavyākhyā に対する解説研究にもとづいて理解せられるところとして、固有の經典としての『アビダルマ大乘経』があつて、その中に「摂大乘品」なる一品があり、それを概説したものが『摂大乘論』であるという立場、あるいは、『アビダルマ大乘経』と言われるような一群の經典類があつて、『摂大乘論』はそれらの説くところを纏めたものであろうとする立場などを斥けて、「この経は、摂大乘論、或いはある偈、更には摂大乘論以外の断片について、それが聖教たる性質あることを表示した単なる呼び名である」と結論づけられている点に窺われる。そのような結論に至るについては、特に次に示すような Pindavyākhyā の説明文に拠られているようである。

chos mñon pa theg pa chen po'i mdo las zes bya
ba 'dis ni tshig gi don bcu po lñun dan ldan pa

ñid du ston te / g'zi mthun pa ñid kyi g'zi'i bdun
pa yin no / (Peking, 358a²⁻³)

ところで、Pindaryakhyaでは、既に紹介せられているように、それに続いてその「アビダルマ大乘経」の性格、あるいは、その経の掲げられる意味について詳しく説明しているのであるが、直前のチベット訳註に伝わる説明文は、

「アビダルマ大乘経」の中で (Abhidharmaśāstre) という「の本論の言葉」によって、実に十「種」なる語句の意味 (padārtha) は聖教 (āgama) に相応しいものであることを示しているのであって、「abhidharma も mahāyānasūtra も共に」言葉の対象を同じくしている「合成」語 (samānādhikaraṇa) [Abhidharma-mahāyānasūtra] の第七格 (Locative) である。

と理解せられるのであるから、そこでは、その説明の前半において、ヴァスバンドウやアスヴァハヴァの註釈においても管見せられるように、本論の構成、組織の基本となる十種の語句の意味は経意の開頭としての聖典性のものであることを表示するために本論で「アビダルマ大乘経の中で」と著わされたことを、又その説明の後

半においては「アビダルマ大乘經の中で」なる合成語の成り立ち、及び、その語の格語尾について説明したものと考えられる。それ故に、著者であるアサンガの上には聖教としての斯かる「アビダルマ大乘經」というものが印象されていたものと考えられる。然も、その經は、後にも言及するように、『大乘アビダルマ經』あるいは『アビダルマ大乘經』という固有の様相をもった經典として人間世界の言葉の上に流布していたという性格のものではないのであって、それ故に、Pindayākhyāにおいても、「アビダルマ大乘經」について改めて詳しく説明しなくてはならなかったのであらうと考えられる。また、アサンガが大乗佛教を撰約しようとする論の著述に當つて、自著なる『撰大乘論』を經典と同格のものとして権威づけるために、「アビダルマ經」を掲げたということでないことは改めて述べるまでもないのであらう。

極めて深大なる知られるべきものにして、甚深広大なる教法の本質は佛、菩薩の力によって語られるが、そうでなくして何処に可能か。……(略)……アビダルマ「経」を語ることがないと、こ「の論(sāstra)」ものが「経意の開頭としての」聖典性(aṣṭava)のもの

として知られないが故に、……(略)……そして、
經の名を示さんがためであって、十地^④「經」の如く
「論の基づく聖教として」アビダルマ大乘經と示さ
れている。

と述べ、更に、

「この論が」聖典性のものであることを知らしめん
がために、アビダルマ「經」と言われる。実に今、
經の著わされる目的が未だ了解されていない人々に
よって了解せられんがためであって、アビダルマ經
と語るのは、これによって教法(dharma-paṭyāya)が
説かれんがためと、經の名を示さんがためとである。
大乘と語るのは声聞のアビダルマを除くためである。
何となれば、アビダルマは凡て聖典であるのでない
と悪了解されるからである。(Nāgao, p. 130, ll. 8-12,
p. 132, ll. 1-2)

と説明せられている。註釈では更に続いて、經律論の三
藏、或いは、声聞藏、菩薩藏の二藏についての教判によ
るなど、その「アビダルマ大乘經」の性格、或いは、そ
の經の掲げられる意味について詳説しているのであるが、
この經の掲げられるについて、ヴァスバンドゥは直前の
説明においても、「アビダルマ經」が人間世界の上に未

だ流布していないのではあるが、この經の本意が広く展
開されねばならなかったことに依るものであることを伝
えているのであって、アサンガによって初めて、この經
の名が明示せられようとしたことがそれらの説明によっ
て知られる。アスヴァブハーヴァの註釈においてもその
註釈の冒頭に、

十の意味によって大乘の凡ての意味を摂約しようと
して、論の組織の自体であるそれら十の意味が「經
意の開頭としての」聖典性のもものとして説く、とい
う仕方です。「本論は」大乘をよく覚了した「菩薩」云
々と開始している。

と説明すると共に、更に、

アビダルマ大乘經の中で、とは、法の思察(dharma-
pravicaya)の根拠となり、或いは、周知せられるが
故に、アビダルマとして概念の立てられる、勝れた
大乘の經の中で説かれるが、別のものの中では説か
れない「意味である」。

と述べて、然も、

それ「大乘」の經とは、「それらの言葉がそこに」
語られているが故にであって、散文と韻文との声と
しての顕現であり、「説く者の」意図せられるもの

のすがたに随つて起つた所聞の記識の句である。

もしそうであるならば、「その」菩薩によってそれがどうして説かれたのか、所聞の記識は彼「菩薩」によって未だ説かれていない、といえ、彼「菩薩」の力によって「所聞の記識が」起つたのであるからかくの如く言われるのであって、天などの力によって夢の中で論や密呪 (mantra) などの把握されるが如くである。……(略)……それ故に「菩薩の力によつて」宣説される如くにあるものこそ、経として相応しいのであって、そうであるから、アビダルマと名づけられるかの大乗の経の中で、である。

などと、「アビダルマ経」の掲げられる意味、或いはその経の成り立ちについて具体的に説明している。それらは、菩薩の威神力によつて宣説された言教がアサンガの上に相承し、それが法の思索或いは教法とその意味の決別の根拠となり、佛の教えもその所説の意味の示現されるものも、一般に承認せられることになる「アビダルマ大乘経」のものとして、アサンガによつて印象され、確信せられたものであることを説明しているものと考えられる。先述の Pindavyākhyā なる註釈の中で、アサンガの掲げる「アビダルマ経」なる合成語について、それ

は、佛所説の意味を頭わに示現するアビダルマも、それの基本となる佛の言教なる経も、共に、意味上、言葉の対象を同じくして同格に置かれる合成語、として説明されているものと考えられるが、また、同じくその註釈において、経のみでは充分でなく、アビダルマによつて経なる言教の意趣のあるところが頭わとせられ、また、アビダルマのみでは聖教としての性格を失うから、従つて「アビダルマ経」とせられるのであるとして「アビダルマ経」の掲げられる意味が説明せられているように、本論文の「経の中に」とは経のウパデーシャとしてのアビダルマが其の儘、即ち経とせられる性格の「アビダルマ経」なる聖教が、アサンガの上に印象されたということになる。そして、その「アビダルマ経」に基づく撰大乘としての『撰大乘論』が造論せられたということは、「アビダルマ経」なる名をもつて単的に表示せられている如き大乘の動向としての、教法の相を不顛倒に示すことによつて人々をして教法の相に向わしめるという、「佛所説の意味を示現する」或いは「法の思索」なるアビダルマの、まさしくの展開でもあって、その『撰大乘論』造論の基本として「アビダルマ大乘経」が印象されたということとは、実に『撰大乘論』の聖教として相応し

い経或いは経の名が印象されたと言う外ない。そして、アサンガによって印象されたその「アビダルマ経」の内容は、具体的にはその経意を基本とする『撰大乘論』に著述せられている如き言教を中心にして推察すべきものと考えられる。

なお、先にも言及するように、本論文の末尾の様相としてチベット訳の伝承では、

撰大乘「論」を終わる。軌範師アサンガの作。(ṅa-hāyanaśaṅgrahaṇi samāptam, kṛtīr acārya-asanḡoḥ)

と伝えているのに対して、漢訳では、末尾を欠く佛陀扇多訳を除いて、このチベット訳の伝承とはその様相が違^⑩う。それについて、真諦訳を除く他の漢訳は、それらの基づくテキストが如何なる形態にあったか検討を要するが、それらは、アサンガが「アビダルマ大乘経」のものとして印象せられるその言教の中、特に「撰大乘」について講述したことを示すものであり、真諦訳については、巻頭の訳述に見られるものと同じ傾向にあって、『撰大乘論』が、かかる大乘経の経意をまのあたりに開顯するものとしてアサンガ以後の佛教者の上に相承せられている立場から意識せられたものと考えられる。

四

さて、『撰大乘論』の序章において、かかる「アビダルマ大乘経」の中で、「大乘をよく覚了した菩薩」が大乘の偉大性を称述せんがために、特に大乘について諸佛世尊の言葉を宣説している、と開始されているのであるが、その菩薩について、Pindavyākhyāでは、第十地に属する菩薩、と述べ、また、アスヴァプハーヴァの註釈では、

陀羅尼と弁才との徳を得たものであり、偉大なる意味を把握し、より顯著に示すことのできる彼「菩薩」によって、或いは、そのような名称のあるものによって「十種の最勝なる言葉が」説かれる。

って「十種の最勝なる言葉が」説かれる。と言う。因に、『中辺分別論』に対するスティラマティの註釈のその劈頭に、

造者が、語るべく教えたところなるが故に、經に尊敬は生ず。そは、此論偈の造者は聖弥勒なり。而して彼は一生補処の故に菩薩の一切の神通と陀羅尼と無碍弁と三昧と根と忍と解脱とによって妙彼岸に至り、菩薩の一切地に於ける障を残り無く断じたるものなればなり。^⑪

云々という説明が為されており、また、『莊嚴經論』に對する利他賢の註釈に、

ここに作者（マイトレーヤ）は、十地の自在性あるにより、彼「四無碍弁」を完全に有するを以て、

と述べて、マイトレーヤについて説明せられているものなど、それらは直前の菩薩の説明に近似したものとして理解せられる。然れば、本論の菩薩について既に言及するように、アスヴァブハーヴァによって、「経なる所聞の記識の句は彼菩薩によって未だ説かれていないといえは、天などの威神力によって夢の中で、論やマントラなどの把握されるが如くに、彼菩薩の威神力によって言教が起った」とも説明せられる、その「大乘をよく覺了した菩薩」とは、ヴァスバンドゥが『撰大乘論註』の帰敬偈の中で、

無動にして出世間なる三昧をよりどころとして聖なるマイトレーヤに逢事し、先例のない正法を示したもう軌範師（アサンガ）に、

とも表白しているように、後の佛教者にはマイトレーヤ菩薩として拝承せられていたものと考えられる。序章の冒頭に述べる「アビダルマ大乘経」における菩薩の宣説とは、マイトレーヤからアサンガへの相承に因るものと

考えられるのであって、それは、ヴァスバンドゥが『中辺分別論』の *Bhāṣya* の帰敬偈の中において、

善逝（如来）の身体から生まれ出たこの論の作者（マイトレーヤ菩薩）と、それをわれわれその他のものに伝えた語り手（アサンガ菩薩）とに礼拝し、

と表白しているような伝説が、アサンガの『撰大乘論』序章の冒頭において著わされているものと考えられる。

それについて、先述の『中辺分別論』とともに、経をウパデーシャし、経を莊嚴するものとせられる『大乘莊嚴經論』、或いは、『法法性分別論』などの造論の様態とも相通ずる一側面が窺われるのであるが、本論序章に示されるものについては、マイトレーヤ菩薩の宣説したもう大乘についての諸佛世尊の最勝なる言葉、或いは、それらの示されようとする言教が「アビダルマ大乘経」のものとしてアサンガに印象され、アサンガはそれらの聞思せられるところに従って、それらの言教を人間世界の言葉として語るといふ経緯によって、論の講述が開始されていることになるのであろう。

そして、本論序章の middle に掲げられる二偈はまさしく序章の綱要を説示するものとして考えられるが、それら二偈は、「ここに偈頌がある」と言って掲げられるもの

で、註釈書においても經典などそれらの偈頌の所在について具体的に指示していない。それについて、本論文中

のその他の、これら二偈と同様な状態で掲げられるある偈頌には『法句經』や『大乘莊嚴經論』頌などに見られるものと同じ場合もあるが、又ある偈頌は、『Pindavyākhyā』の中に、或いは、ステイラマティの『中辺分別論』などにおいて「アビダルマ經」の偈として引用せられている場合もあって、序章中の二偈は偈頌の内容の上からも「アビダルマ經」に帰せられるべきものと考えられる。そしてこの二偈は、先述するアスヴァブハーヴァの説明などから推考すると、マイトレヤ菩薩によって宣説せられるところのものであり、われわれの世界に伝達する言葉としてはアサンガに帰することになる。

因に、『撰大乘論』所引の「アビダルマ經」との関連性という点からも『阿毘達磨集論』の、

如薄伽梵於大乘阿毘達磨經中說如是言。(以下經文引

用、大正三二、六九三下—六九四上)

或いは、論が Abhidharmasaṃuccaya (阿毘達磨集) と名づけられるについての理由句の第二の下に見られる『雜集論』の、

遍所集者謂、遍撰一切大乘阿毘達磨經中諸思攄処故。

(大正三一、七七二下)

などに言及しなくてはならないかと思う。既に述べるまでもなく、それらに相当する梵文或いはチベット訳の伝承では、『撰大乘論』に対する Pindavyākhyā、ステイラマティの『中辺分別論』、『唯識三十頌』などにおける用例と同じく、Abhidharmaśāstra とのみその經名を掲げて、大乘の語が省略されているのであるが、後者の『雜集論』のその用例は、『撰大乘論』における前上の考察によって理解せられるように、一定の形態をもっているのではなく、著者であるアサンガの上に、マイトレヤ菩薩の宣説を通じて傳承される言教が、法の思察の根拠としての「アビダルマ經」なる聖教として、印象せられるものの中、思惟の基本となるものの凡てをその經意の開顯として撰約するものであることを、註釈者は説明したものと考えられる。

更に『集論』のそれは、『撰大乘論』の巻頭に示されているものとはその様相が違い、『十地經』などの如く、一般に流布せる固有の經典名とその經文をそれは掲げている如き印象を与える。『撰大乘論』の第二章「所知相」においても、「アビダルマ經」の中で、法は三種であつ

て、云々と世尊が説いている、という用例が見られるのであるが、それらは、佛教の伝承として諸先輩を通じて世尊によって説かれたものとせられていた言教が本論の著者の上に相承せられていて、それらが、著者に印象される「アビダルマ経」なる聖教の言葉にふさわしいものとして、すなわち、その経に属するものとして引用せられたかとも考えられるが、寧ろ、先の『撰大乘論』序章に対するアスヴァブハーヴァなどの註釈によって、「アビダルマ経」なる聖教は、マイトレヤからアサンガへの相承において印象されたものとして推考せられてくるのであるから、それらの言葉が著者の上にマイトレヤ菩薩の宣説によって拝承され、その言教が「アビダルマ経」なる聖教として印象されたものであらうと考える。

五

『撰大乘論』が造論せられるについて、それは、アサンガの上に、マイトレヤ菩薩を通じて拝承される諸佛世尊の甚深にして広大な大乘の基本となる言教が、「アビダルマ大乘経」に帰せられるものとして印象されて、その聖教に基づいて講述、造論が開始せられようとする。そのことは、アサンガの上に啓示的にその体系が

現われ出たと言うことではなく、アサンガが、所謂諸先輩の教法を総合し、篤い心情をもって師資建立せられているところのその菩薩による言教に基づいて統一するという、即ち、「アビダルマ大乘経」の経意の開顯として大乘を撰約し論述するということであつたものと考えられる。そのことは、瑜伽行唯識派の正依の經典とせられる『解深密経』なる經典名の上にも単的に表明せられているように、諸佛世尊の言教の意図をウパデーシャするという、大乘としての了義教の開顯という大乘佛教の動向にあるのであつて、そこに、大乘佛教展開の、まさしくの佛教開顯者のその一人として、祖師に位置したアサンガ特有の歴史的使命、經典觀、或いは、宗教性が窺われる。『撰大乘論』は、その大乘佛教の動向において、祖師に位置するアサンガによって、菩薩を通じて「アビダルマ」という大乘経が印象され、それにもとづいて造論せられたものであるから、後の佛教者にとっては、真諦訳に單的に表明せられているように、『撰大乘論』はまさしく大乘なるアビダルマの教であり、大乘の経として拝承し、確信せられる。『撰大乘論』がその時代の佛教の思想領域にあつて、その時代に対処し、佛陀の言教の密意がまのあたりに開顯せられていくという

大乘の展開の歴史的意味の一端が、本論の造論の背景に窺われる。

ヴァスバンドゥの帰敬偈がそうであるように、また、アスヴァブハーヴァの序章に対する註釈の末尾にも、

この論において師資建立が為されることによって、大乘なる佛道が示されることになる。それによって大菩提をよく成就せしめるが故に、大乘が佛の言葉なるものとしてまのあたりに知られる。しかれば、あらん限り、また、あるがままに勝れたものが説かれていのであるから、ここにおいて、大乘の凡ては円満となるのである。それ故に、撰大乘である。

(取意)

と述べているように、アサンガ以後の佛教者にとっては、本論序章の解説について語調を高めずには済まされなかったものが如実に表明せられている。

註

この小篇は、昭和五四年六月の本学佛教学会例会において発表したものに、若干の補訂を施したものである。

① 序章と言われるものは玄奘訳による「総標綱要分第一」に相当するのであるが、チベット訳では第一章「所知依」章の中に含まれている。真諦訳、笈多共行矩等訳は共にチベット訳の伝承のように、「依止勝相中衆名品第一」或

いは「応知依止勝相勝語第二」なる章名の下に置かれて、この序章に相当する本文を「無等聖教章第一」と「十義次第章第二」とに分節せられている。『撰大乘論』の構成上、巻頭に置かれるこの本文を玄奘訳のように序章と見做すことに異論はないと考える。曾てチベット訳をテキストとして拙訳「無性造撰大乘論註序章の解説」(『佛教学セミナー』二七号所収、昭和五三年)を発表したが、その序章の分節は仮そめに施したものである。この小篇の中で本論文及びアスヴァブハーヴァ(無性)註の和訳による引用については前記拙訳を用いた。拙訳の重複することをお許し願いたい。ヴァスバンドゥの註釈の試訳はチベット訳による。

② それらの一についてここでは省略するが、これらの条項の規定の仕方をもぐって論究せられているもの一つに、一郷正道「造論の意趣に関するシャーントラクシタ、カマラシーラの見解をめぐって」(『密教学』一三・一四合併号所収、昭和五二年)参照。また、それらの条項の理解についても同論文を参照。

③ 長尾雅人『中観と唯識』、四〇四頁註⑤参照。

④ 山口益『山口益佛教学文集』下、三二九頁参照。

⑤ 特定のテーマ、と取意したのは同註釈の「一つの事象を以ってでもなく、世俗、勝義の二諦を以ってでもなく、遍計所執など三〔性〕を以ってでもなく、三時、無為、四〔諦〕を以ってでもなく、名など五〔法〕を以ってでもない」による。

⑥ 「撰〔大乘論〕は〔撰〕決択〔分〕としてきわめて広く説かれているもの(広決択)より幾分か講説される」。玄奘

訳「從広決撰集少分、以言略撰大乘」、真諦訳「技闡決定藏、以撰大乘」。長尾「漢藏本対照研究」(「撰大乘論世親訳の漢藏本対照」『東方学報』京都第一三冊所収、昭和一八年)、二二八、一二九頁参照。

⑦ 後に言及、本誌、二六頁参照。

⑧ 同書、二八頁以下参照。高田論文参照(本誌次註参照)。

⑨ 高田仁覚「阿毘達磨大乘經について」(『密教文化』二六号、昭和二八年)、三六頁参照。この高田教授のご研究について注意せられているものとして、袴谷憲昭「Mahayana-saṃgraha における心意識説」(『東洋文化研究所紀要』第七六冊、昭和五三年)、二四五頁註²⁶⁾など参照。

⑩ 前掲高田論文にはその他の註釈文と共と詳しく和訳し紹介せられている。同論文参照。

⑪ 前掲高田論文、二二頁参照。

⑫ 本誌、二三、二四頁参照。

⑬ 後に掲げるヴァスバンドウやアスヴァブハーヴァの註釈参照。

⑭ これによって「アビダルマ經」が固有の形態をもって流布していた經典であることを説明するものでない。前掲高田論文、二五頁参照。なお、チベット訳伝承では、本論で『十地經』『般若經』『解深密經』などそれらの經名を掲げる場合、「アビダルマ經」の場合とは違い、sūtra の語

を略称している。

⑮ 長尾「漢藏本対照研究」一三〇頁¹⁴⁾にも註記されているように漢訳では「造此論」(玄奘、真諦両訳)、「釈彼經名」(笈多訳)。

⑯ 長尾「漢藏本対照研究」、一三二頁以下、前掲高田論文、二五―二七頁参照。

⑰ 本誌、二二頁参照。

⑱ 山口益訳註に依る。同書、二頁参照。

⑳ 野沢静証「利他賢造『莊嚴經論初二偈解説』に就て」(『宗教研究』新第一三卷二、昭和一二年)、六一頁参照。

㉑ 本誌、二五頁参照。

㉒ 玄奘訳「我師於此非前後、逢事聖者大慈尊、依止無動出世間、放大法光三摩地」。チベット訳および漢訳、長尾雅人「漢藏本対照研究」、一二六、一二七頁参照。最勝子の『瑜伽師地論釈』には「無著菩薩位登初地、証法光定得大神通、事大慈尊」(大正三〇、八八三下)。

㉓ 前掲高田論文、三〇―三一頁参照。

㉔ 『大乘佛典』(中央公論社)卷一五、二二七頁参照。

㉕ 拙著『インド佛教における唯識思想の研究』(文栄堂、昭和五〇年)、一七三―一七四頁参照。

(本稿は昭和五五年度文部省科学研究費「一般C」による研究成果の一部である)